

できる限りの防御を

日本気象協会は2月17日に今年の東北地方のスギ花粉飛散量を発表し、昨年の3・6倍、例年の1・1倍と予測した。大量飛散により、新たに花粉症になる人も増えると思われる。

花粉症の症状は、くしゃみ、鼻水、鼻づまりという風邪の症状のほか、目のかゆみを伴うのが特徴だ。花粉が体内に入ってもすぐに花粉症になるわけではないし、アレルギーの素因を持っていない人は花粉症にはならない。アレルギー体質の人が長年(数年から数十年)にわたって花粉を吸い続けると、花粉に含まれる抗原に対し抗体が生み出される。抗体の量がある基準に達した後に花粉を吸入すると、抗原と抗体が反応し、生体に有害なヒスタミンが遊離され、さまざまな症状を引き起こす。

花粉症の患者数は正確には分かっていない。環境省の資料によると、2008年の全国の耳鼻咽喉科医とその家族を対象とした疫学調査の結果では、アレルギー性鼻炎の有病率が39・4%、花粉症全体が29・8%、スギ花粉症が26・5%だった。また、スギ花粉症の有病率は10年

間でおよそ10%増加している。かく言う小生も、25年前の春に突然発症し、以来毎年、2月上旬から4月下旬にかけて、ゆううつな日を過ごしている。

私見創見 Sunday

スギ花粉症の患者がこれほど多いのに、どうしてスギが生産され続けているのか。それは、スギが日本の林業では最も重要な樹種と捉えられているからである。スギは成長が早く、建築資材としての需要が高いので、戦後、国が積極的な造林を進め

花粉症の春

てきた。ちなみに、スギ林の面積は東北地方が一番広い。花粉問題に対し、国や自治体はさまざまな取り組みをしている。林野庁は17年度に少花粉品種などを一千万本に増やすこと

一方、独立行政法人農業生物資源研究所は、スギ花粉症の根治を目指し、コメを原料とした医薬品の有効性と安全性を研究中で、独立行政法人理化学研究所統合生命医科学研究センター

環境省の花粉観測システム(はなごさん)は全国各地の飛散状況をリアルタイムで公表しているほか、青森県花粉情報研究会は県内の飛散状況の予測データをまとめている。ぜひ参考にしてほしい。

三浦 和彦 東京理科大学教授



こま子専ゾ本会
ひ生粒が口日前卒
ず市の微ア大会大
か戸のル本会学理
・八中ゾ本会学理
ら、気口日副会学理
う年、空ア、会電京
み1955年、空ア、会電京
れ。(エで、学気東
門ル学気東

を目標に掲げた。富山県農林水産総合技術センター森林研究所が開発した無花粉スギは、花粉を全く出さず、種子による大量増殖が可能というから期待が大きい。それでも、実際にスギ花粉の飛散量が減るまでには数十年の年月がかかるとみられる。

花粉症ワクチンの開発を進めている。ただ、これらの対策が実現化されるまでは、花粉の飛散状況を理解し、自分の身は自分で守らなければならない。東北地方のスギ花粉の飛散時期は2月中旬から4月中旬である。花粉の多い日は、①晴れて

日常生活を改善し、薬で症状を緩和しつつ、つらい花粉の時期を乗り越えたい。
ノースアジア大学教授を退官した向谷地博信氏に代わり、東京理科大学教授の三浦和彦氏が担当します。